随想

たなからボタモチ

愛知淑徳大学文化創造学部教授
角田達朗

「月とカニ」の東京公演

「たなからボタモチ」とはまさしくこういうことを言うのだろう。私が顧問をつとめる学生劇団「月とカニ」が去る八月、東京で公演をしたのである。四月に開催された学生劇団ばかりの演劇フェスティバルで1劇団だけに与えられる〝特別なご褒美〟が東京公演で、しかも参加劇団はわずか4団体だったが、「月とカニ」にそれが与えられようとは私は思ってもみなかった。きっと当の「月とカニ」諸君も驚き当惑したのだろう。部長をはじめ何名かのメンバーから相談を持ちかけられ、私は台本を推薦し脚色し、キャストのオーディションに参加し、その後の練習にも時折顔を出した。かなり厳しい意見も何度か口にした。

幸いにして今年は新入部員がおおぜい加わっており、そのおかげもあって練習には活気があった。しかしその反面、若さゆえの甘さ・未熟さも多々目についた。台本をどのように解釈し、それをどのような方向性で上演に具体化するのか、その基本方針が定まっていない。台本の読み込みが浅い。自分たちのしていることを観客の視線で客観的に見ることができない。こうした欠点はほとんど致命的なことのように私には思われた。熱気と勢いは感じるが、熱気と勢いだけで重大な欠点がどこまで解消できるものなのか……。

不安な状態のまま幕が開いた。驚いたことに、彼らの上演は私を満足させた。上演回数はわずか3回だったが、その3回を通して更に進歩し続けた。私の意見が功を奏した所もいくらかはあっただろう。彼らの熱気と勢いが観客を前にした緊張感によって適度に抑制されてもいたようだ。だが、それだけではない。考えてみれば、こうすれば必ず見るに足る作品ができるという絶対的な方法など存在しない。そのように不確かだからこそ、新しい作品を作る作業はスリリングで刺激的なのだ。そのことを改めて実感したという意味で、「月とカニ」の東京公演は私にとっても美味しいボタモチだった。たなは開けてみるものである。